

（付） 一体となること

創造主は初めから人を男と女にお作りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々でなく、一体である。

（マタイ一九・四〜六）

これはイエス・キリストの言葉です。きょうはこの言葉に基づいて、結婚について三つのことを申しあげて、式辞といたします。

聖書の知恵の言葉に、「世の中に不思議にたえないことがある、男の女にあう道がそのひとつである」（箴言三〇・一八〜十九）というのがあります。お二人もいま不思議にたえない思いで、ここに立つておられるのであらうと存じます。

もちろん、お二人は最初の出会いから今日に至るまでの間に、独りよく考え、家族と相談し、何度も話しあつて、それぞれ自分の責任でこの結婚をお決めになり、それぞれ互いを自分の生涯を委ねるべき相手として選びとられたのであります。

しかし聖書は、それにもかかわらず、お二人はその生まれる前から神によって夫婦たるべく定められていたと申します。

「創造主は初めから人を男と女とお造りになつた」と言うのはその意味です。

同じことを聖書はさらに神話的表現をもって、「神は男を深い眠りにおとされ、その間に彼のあばら骨の一部を抜き取り、それをもつて女を造られた」と言い、その女を男のもとへ連れてくると、男は「ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉

の肉」と歌つたと述べております。（創世記二章）人生の伴侶を得た喜びと、男女の邂逅の不思議が素朴に、力強く歌われています。

結婚における第一の問題は、誰と結婚するか、すなわち相手の選択ですが、ふつう「選ぶ」と申しますと、私どもは、良いもの、自分にとつて良いものと思われるものを選びます。しかし人を選ぶこと、殊に結婚の相手を選ぶことはそうであつてはなりません。相手の良いところだけ、自分の好きなどころだけを勝手気ままに選びとるのではなくて、相手のすべてを、その欠点も、短所も、その人の好ましくない点や異なつた生活背景も、その人の家族も親族も、全部があるがままに受け容れることとでなければなりません。それが人格的な選択であり、これ以外に人間を選ぶということはありえないし、あつてはならないと申します。

ですから結婚における選択は、結婚する今のこと、あるいはこれまでに既に終わってしまったことではなく、これから連れそつて歩く長い人生を通して絶えず為すべきことなのであります。どうか結婚生活において、これからのようなことがあつても、このことをしっかりと覚えてお二人がお互いのすべてを容れあつて生きていただきたいと思ひます。結婚生活で一番大切なものは、この謙虚さです。夫婦にこの謙虚さがあります時に、二人は人間の恣意的な選択を越えて、お互いが神がそれぞれに与え給うた「ベター・ハーフ」であるということを信ずることができ、互いに「これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉」と歎びの歌声を交わしながら共に生きることができあ

りましょう。

さて、先のイエスの言葉に「人は父母と離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」とありました。「二人はもはや別々ではなく、一体である」にはいろいろな意味が含まれていると思いますが、私には、これは結婚生活には二人を結び付ける一つの目的があるべきである、ということをやっているように考えられます。これが結婚の第二の問題です。「愛とは二人が互いを見つめあうことではなく、二人が共に一つのものを見つめることだ」と言った人がありますが、結婚には必ずこの一つのものが必要なりません。

ではその一つのものとは何でしょうか。お二人は言うまでもなく、それぞれ別々の存在であります。これからは人生に対して二人に共通した一つの考え方と態度をもつことが求められます。そして、その人生态度を実現していくことを共通の目的とし、課題として生きていかなければなりません。

では聖書は、この一つのもので何であると言うのでしょうか。聖書は端的に「結婚の目的は神に仕え、人に仕えることである」と申します。それは、結婚生活において、いつもあなた方の目を上にあげて、不思議の源であり、結婚生活の真の導き手である方を恐れと信頼をもって絶えず覚えよということであり、また結婚生活においては自分たちだけの幸福を求めめるのではなく、広く目を社会と世界に向けて、結婚生活において学んだ愛を他の人々に傾けよ、ということでありましょう。結婚は決して二人だけの個人的出来事ではなく、私どもの隣人に関わる公の事でもあります。そこに結婚あるいは家庭の社会的責任があると共に、またその自覚が私どもに結婚生活のさまざまな試練をのりこえさせてくれる大きな力ともなるのです。

何にしましても、この一つのもを共に見つめるとき、一つの目的に共に生きるとき、私どもの結婚は、たとえ外から見てもいかにみすばらしく、貧しく、役立たずに見えようと、それ自体深く充たされた価値と内容をもつものとなるのです。ここに結婚生活の本当の幸福があります。

第三に、それでは私どもはいかに結婚生活を生きるべきでありましょうか。

先程の「一体になる、一体である」ということのもう一つの意味は、文字通り即物的に「共に生きる、共同生活をする」ということです。家庭生活というものは極めて平凡な日常そのものです。行住座臥共に居り、共に暮らす、そのこと自体が大切で、貴いものであります。どうかお二人が少しでも長い時間共にいて、共に生きることの喜びと、その喜びを傾けあうことの幸いを十分に味わわれるように希望します。

聖書は日常における夫婦の生活の心得として次のように申しております。

妻たちよ、あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです。このような装いこそ、神の御前でまことに価値があるのです。

夫たちよ、妻を自分より弱いものだとわきまえて生活を共にし、命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい（第一ペトロ三・一〜七）

一緒に生活することを通して、私どもは愛しあうことを学

び、それぞれが一人の人間として少しく成熟へと導かれていきます。しかし共同生活は、実はそのこと自体よりも次のことを悟るためにこそ大切なのであります。A・シュワイツァーの言葉を借りて申します。

「一般に人間と人間との関係のなかには、わたしたちが通常みとめているよりも、はるかに多くの神秘が潜んでいるのではないだろうか。なん年もまえから毎日いっしょにくらしている相手であっても、ほんとうにその人を自分が知っているとは、わたしたちのだれも主張するわけにはいかな

い。・・わたしたちがたがいに神秘であるというこの事実を、わたしたちはそのまま受け入れなければいけない。たがいに知りあうということば、たがいに相手のことをなにもかも知りつくすということではなく、たがいに愛と信頼とをい

人（生いたちの記）
人は夫婦といえどもあくまで互いに個別の他者であって、互いに知りつくす、理解しつくすということなど決してできない存在であります。そこに個人の尊厳があり、互いに心からの尊敬をもって接しなければならぬ理由があります。どうぞお二人がお互いを自律的存在として尊重し合い、互いに愛と信頼を抱きあい互いに信じあうて生きていただきたいと思ひます。

そしてこの愛と信頼から生み出される自由と慎しみの中から自ずと家庭の秩序が生まれます。この秩序の中では、聖書は「夫は妻のかしら」であると言ひ、夫に対しては「妻を自分のように愛しなさい」と勧め、妻には「夫を敬いなさい」と諭し、いずれに対しても「キリストに対する畏れをもって、互い

に仕え合いなさい」（エフェソ五・二一―三三）と教えています。この秩序があつて、家庭は初めてホームとなります。ホームとは「避難所」の意です。お二人の家庭が、夫にも妻にも、そして周りのすべての人々にとつても、深い心の安らぎを与えてくれる人生の避難所となることを祈ります。

最後に、聖書は妻と夫の関係を教会とキリストのそれになぞらえ、「人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人が一体となる」ということは、実に「偉大な神秘（ミステリー）」であると申しております。（エフェソ五・二一―三三）神秘は謎とちがつて私どもが自力で解き得るものでなく、不思議にたえない思いをもつてたたずむ私どもに、向こうから扉を開いて、与え、示されるものです。聖書はこれを恵みとも申します。ですから、どうぞお二人は今から手と手を取りあい、信頼と希望と愛とをもつて、この「偉大な神秘」の中にお入り下さい。お二人が自分たちを「神が結び合わせてくださったもの」としてつかりお信じになるならば、そこには必ずや神の豊かな祝福が待っていることでありましょう。

これをもつて式辞を終わりますが、ご参列の皆様が、お二人の結婚の証人として、この結婚に対する責任をそれぞれに頒ちもつて、お二人の新しい歩みを見守つて下さいますようお願い申し上げます。

「付」 祝辞として

よく人は結婚生活を二人三脚にたとえます。しかし結婚生活はあんな不自由なものではありません。では何にたとえられるかと申しても私にはよい比喩は思ひ当たりませんが、次のハーリール・ジブランというパレスチナの詩人の結婚についての詩の

一節をお聞き下さい。

「あなた方は共に生まれ、永久に共にある。．．．でも共にありながら、互いに隙間をおき、二人の間に天の風を踊らせておきなさい。愛し合いなさい。しかし愛をもつて縛る絆とせず、ふたりの魂の岸辺の間にゆれ動く海としなさい。．．．互いあまり近く立たないように。なぜなら寺院の柱は離れて立っており、樫や糸杉は互いの影にあつては育たないから。」

「預言者」から

いつも一緒に生活しながら、いや永久に共にありながら、互いあまり近く立たないで、二人の間に天の風を躍らせておく。ゆれ動く海のあちらとこちらの岸辺に立って互いに尋ねあい、互いに呼びかわしあつて、互いに責任ある（応答する、レスポンスフルな）存在となつていく。結婚生活とはこうした生き方を共に習つていく、興味ある愉快な生活です。